神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手
著者	千葉　毅
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 38 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2012 年（平成 24 年）3 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手

千葉　毅

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する縄文時代の土偶・人面把手一四点について紹介を行った。これらは、発掘調査によって得られたものではないが、土偶や人面把手の出土例が少ない神奈川県域において、重要な価値を有するものが多い。

特に栄区公田ジョウロ塚遺跡出土の大形の頭部資料は、縄文時代の頭部表現の中でも最大級のものである。頸部以下の形態も含めて現状では類例がなく、不明な点が多い。本稿ではその全体の形態について若干の検討を行った。

また、当館所蔵の土偶と横浜市歴史博物館保管の土偶が接合することも明らかになった。表採した土偶同士が接合することは極めて珍しく、貴重な例といえる。

【キーワード】　縄文時代　土偶　人面把手

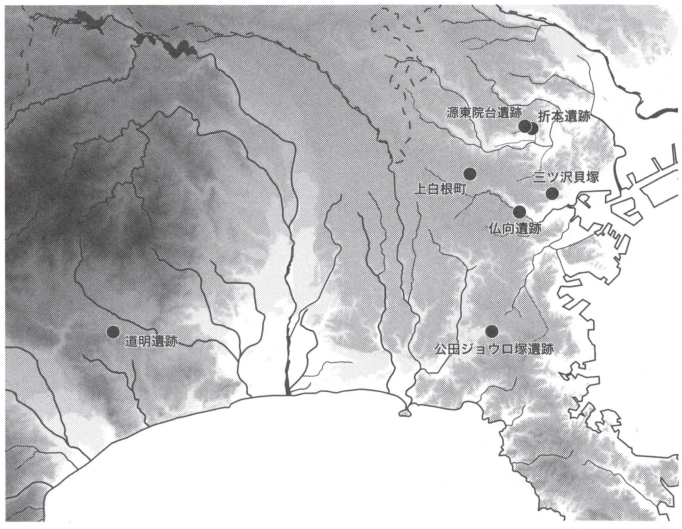
はじめに

神奈川県立歴史博物館では、神奈川県内で出土した縄文時代の土偶、人面把手一六点を所蔵している。これらは、開館以来収集してきた購入資料、寄贈資料である。これらの資料には、これまでに略報や部分的な提示が行われているものもあるが、ほとんどは未報告のものである。筆者はこれらの資料についての再整理を行っており、今回はそのうち報告可能となった一四点の資料について報告を行う。

所蔵資料について

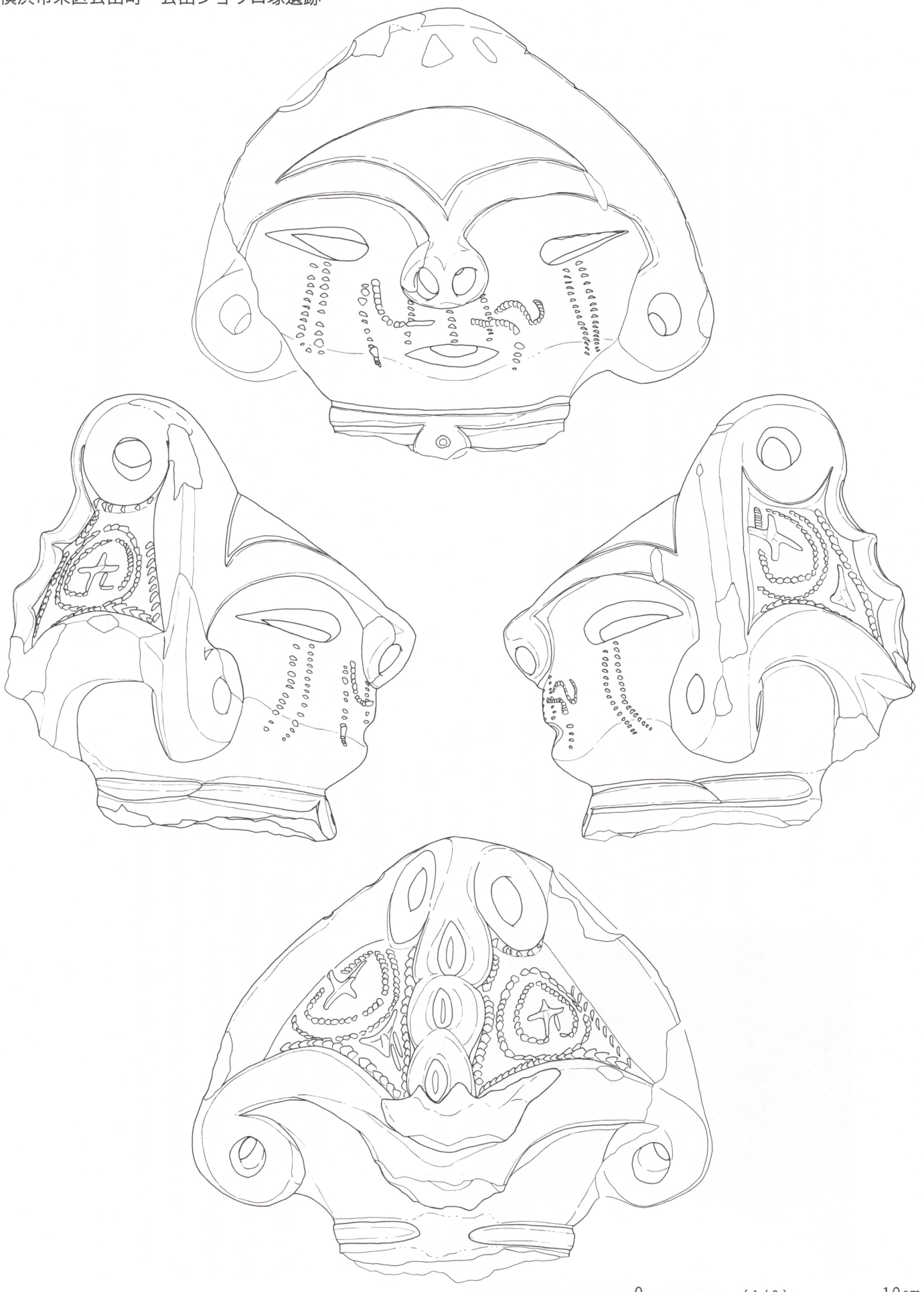
今回報告対象とした資料は一点を除いて横浜市内で出土・採集されたものである。発掘調査によって得られた資料はなく、すべて表採品であるため、遺跡内での評価などは成しえない。観察所見などについては第一表を参照されたい。

遺跡の位置は第一図に示した。



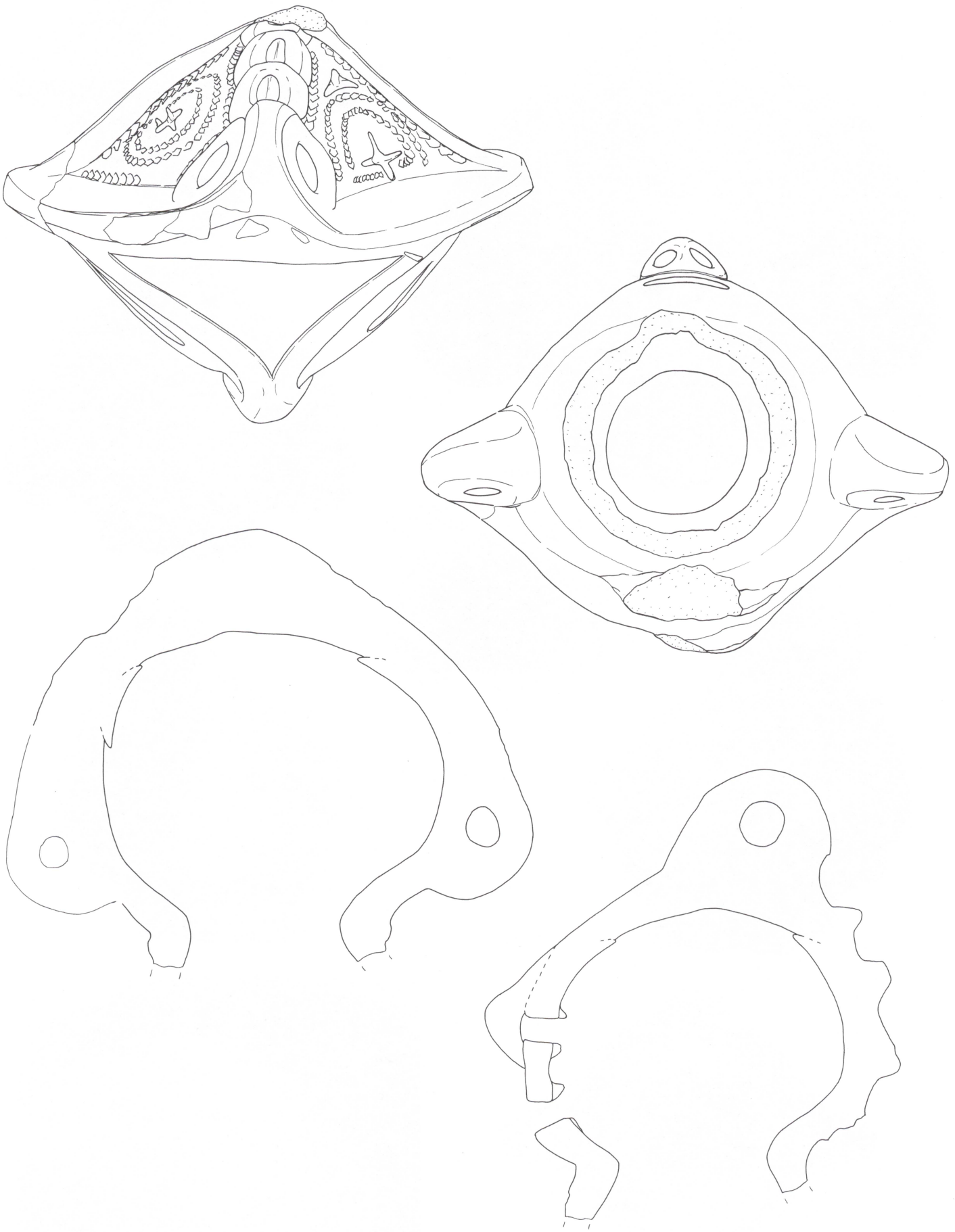
第１図　所蔵土偶・人面把手出土遺跡の位置

横浜市栄区公田町　公田ジョウロ塚遺跡



第２図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（1）

横浜市栄区公田町　公田ジョウロ塚遺跡



第３図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（2）

横浜市栄区公田町　公田ジョウロ塚遺跡



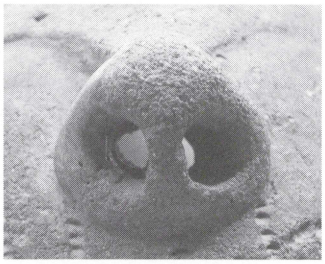
（正面）



（上面）



（背面）



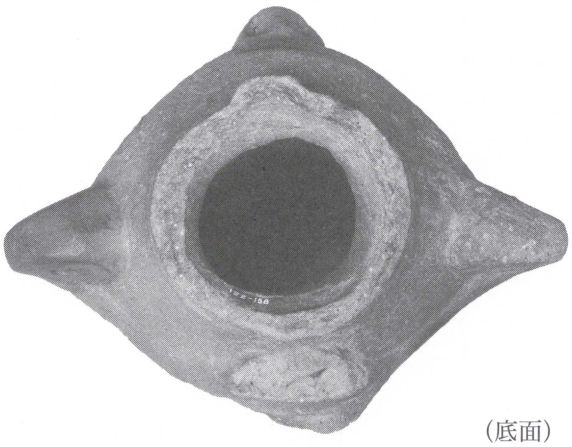
（鼻部分拡大　下方より）



（右側面）



（左側面）



（底面）



（内面）

（縮尺は不同）

第４図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（3）

公田ジョウロ塚遺跡（註一）

第二図～第四図は、中空の不明土製品残欠である。頸部以下、右耳、鼻の一部、頭頂部の一部および後頭部の一部を欠く。現存で高さ一七・七cm、幅一九・四cm、厚さ一六・二cmを測る。

前面は低平な隆帯による眉、粘土貼り付けによる鼻、穿孔による眼、口、耳、また口元から頬にかけては連続角押文による文様が描かれる。頸部には隆帯が巡り、正面にボタン状の貼付がみられる。眼は細く、釣り上がり気味の目尻を呈する。鼻は、顔面の中心からやや下方の位置に、鼻頭が上方へ盛り上げるように作出されている。鼻孔は大きく作出される。眉を描く隆帯は、耳のやや上から緩い弧を描きながら鼻に接続する。両脇を沈線がなぞっており、眉の輪郭を明瞭にしている。口は軽く開く。鼻の中心よりもわずかに右に偏る。顎の表現は緩い稜線によりわずかに認められる。耳は左のみが残存する。穿孔が施される。穿孔内には擦痕、調整痕などはみられない。上方よりも下方（耳たぶ）が厚くなっており、安定感がある。口元から頬にかけては、連続角押文による文様が描かれる。両頬には眼の下から二条の連続角押文が垂下する。鼻から口元にかけては、縦方向と横方向および曲線的な文様が描かれている。他の要素の作出に比べ、連続角押文自体はあまり丁寧でなく、施文の間隔や強弱は一定でない。頸部には隆帯が巡り、正面にボタン状の貼付けを持つ。

全体によく磨かれており、柔らかな光沢を持つ。また口元から鼻、頬にかけて、極めてわずかではあるが赤彩が認められる（註二）。

文様同士の切り合いが少なく、施文順序は良く分からない。隆帯の重なり方から左眉、右眉、鼻の順に、また鼻の裾に文様が施されていることから、鼻を貼り付けた後に連続角押文が施されたらしい。眼、口、鼻の穿孔は外側から内側へ向かって行われており、内面には孔の縁に粘土の盛り上がりが顕著にみられる。

背面は、頭頂部のメガネ状突起から垂下する鎖状隆帯と耳の後方から後頭部中心につながる弧状の隆帯によって、大きく二つに区画されている。それぞれの区画には三叉文、十字状の文様、連続角押文などが施される。隆帯は後頭部先端が欠損している。

左方の区画には、十字状の文様、三叉文がやや削り取り気味に描出される。十字状の文様の周囲には、二条の単列連続角押文が巡る。鎖状隆帯および弧状隆帯脇には連続角押文が施される。右方の区画には三叉文は描かれず、十字状の文様とそれを囲う連続角押文が施される。また鎖状隆帯、弧状隆帯脇だけでなくメガネ状突起の下端などにも連続角押文が施される。施文順序は、左右の区画のいずれも、十字状の文様を描いた後、それを囲う二条の単列連続角押文、隆帯脇の連続角押文となる。頸部の隆帯は後正面では接続しない。鎖状隆帯と弧状隆帯が交わる箇所およびその下方の弧状隆帯先端の二箇所でやや大きな欠損が認められる。

頸部は太い円形を呈する。顎の下方で括れ、さらに下方へ向かい外反する。頸部の欠損はほぼ平坦になっている。

内面のちょうど眉の裏側あたりには、水平に輪積み痕のような段差がある。輪積みにより粘土を筒状にした後、その上に蓋をするような製作技法が考えられる。内面調整は粗く、横方向の擦痕が認められる。

文様の様相から勝坂式前半の所産と考えられる。

本資料は、頸部まで中空となる形態や大きな鼻、鼻孔などに特徴が指摘できるが、最大の特徴は「大きさ」であろう。縄文時代に数多く存在する人面・顔面表現の中で、これほどの大きさのものは極めて稀である。また先述のように鼻に対する鼻孔の大きさも本資料の特徴である。当該期の土偶、人面把手において鼻孔が重要視されていたとの指摘がなされているが（吉本・渡辺一九九四など）、その中においてもこれほど大きな鼻孔を持つ例は少ない。頸部以下の形態については後に改めて触れたい。

なお、本資料は以前にも『神奈川県史』（赤星・岡本一九七九）、『神奈川県立博物館だより』（川口一九八七）をはじめ、多くの刊行物で紹介されてきた当館の代表的な収蔵品である。これまでは写真のみの紹介であったため、実測図を公表し改めて紹介した次第である。

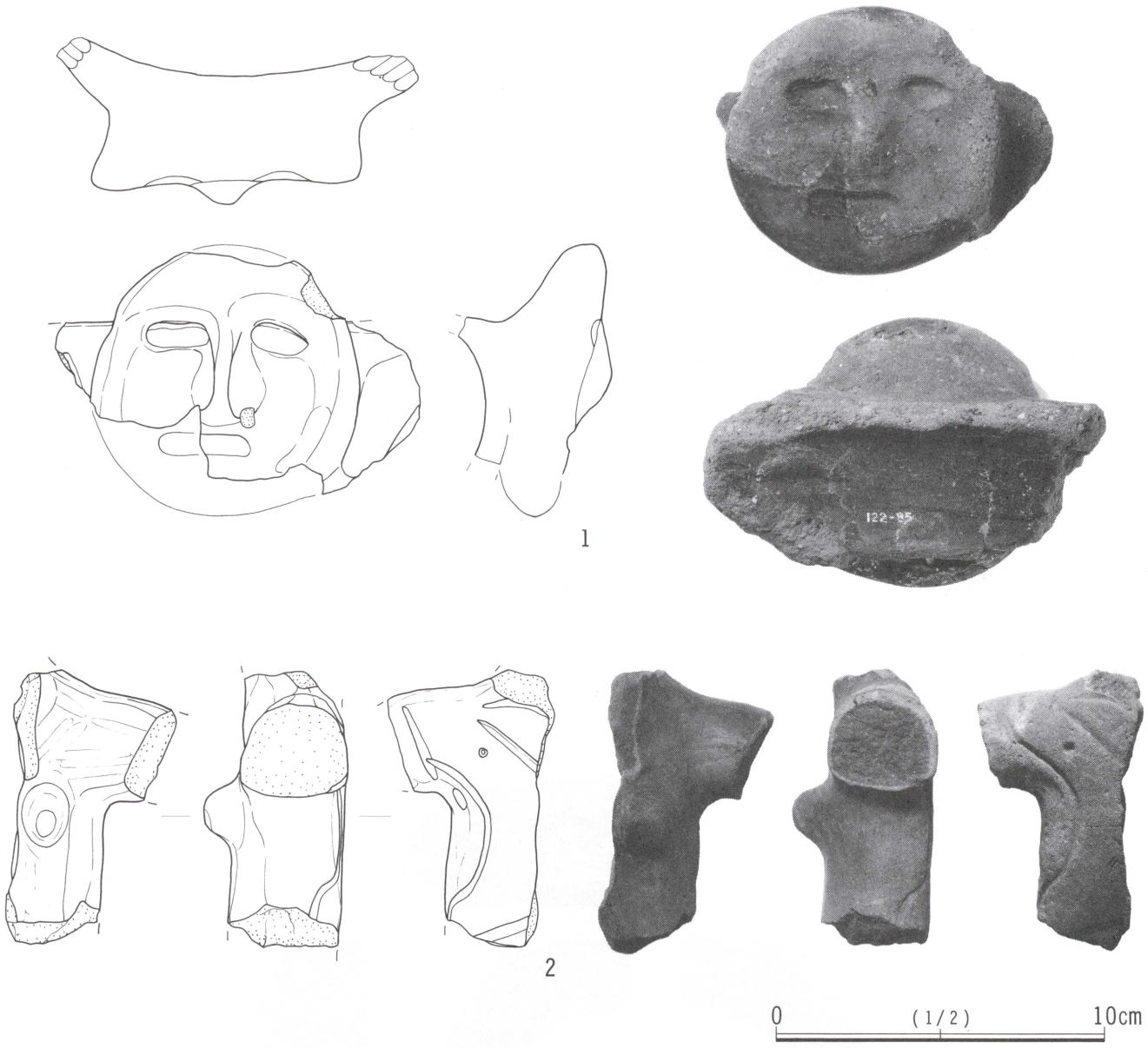
三ツ沢貝塚

第五図一は、人面把手の残欠である。顔面部は右頬から顎にかけて欠損する。現存で高さ八・〇cm、幅一一・二cm、厚さ四・七cmを測る。土器口縁部側面に付される円形の顔面である。凹線により眼、口が描出される。眼の周囲は、眼に沿ってミガキが施され、眼窩状に緩く窪んでいる。鼻が緩やかに突出する。顔面は概ね全体が磨かれているが、周縁は欠損面も含め摩滅する。内面は横方向の擦痕が認められる。時期は不詳だが、形態から後期の所産と考えられる。

第五図二は、中実土偶の頸～腰部左半の残欠である。腕部も肩先を残し欠損する。現存で高さ八・四cm、幅五・〇cm、厚さ四・三cmを測る。前面には乳房の表現以外は文様が施されない。乳房は粘土粒貼付けによる。貼付け後は裾をよく磨いている。前面はミガキの痕跡が明瞭に残っており、鈍い光沢を持つ。背面は摩滅しており、調整痕は観察できない。背面には沈線による曲線、直線の文様や刺突が施される。摩滅しているせいもあり、沈線は不明瞭で鋭さを欠く。欠損面は平坦である。粘土塊の境界で割れている可能性が高い。後期の所産であろう。

第六図一は、中実の山形土偶脚部残欠である。現存で高さ六・六cm、幅六・七cm、厚さ四・三cmを測る。足裏は平らにケズリ成形されており、自立する。脚内側が強く湾曲する。腰部と足首に沈線による文様が施される。腰部の文様は横方向の沈線を描いた後、やや太い縦位の単沈線を描き、その間を斜位のやや細い単沈線で充填する。縄文は施されない。中心に軸心の痕跡が認められる。腰部の欠損面は、周囲に割れた痕跡があり、中央は窪む。窪んでいる箇所は割れた痕跡は認められないことから、腰部以上は中空になる可能性がある。全面に丁寧なミガキにより調整されており鈍い光沢を持つ。つま先から足裏にかけては摩滅の度合いが強く認められる。地面に設置される状況が多かったためであろう。稜線の湾曲、文様の丁寧さなどから左脚と判断した。

第六図二は、中実土偶の脚部残欠である。現存で高さ四・二cm、幅四・一cm、厚さ三・四cmを測る。全体に摩滅している。自立するが、足裏の周縁は丸みを帯びており、やや安定感を欠く。全体にミガキによる調整が施されていたようだが、摩滅しているため判然としない。欠損面が滑らかなことから、腰部との接合面で欠損したものと考えられ

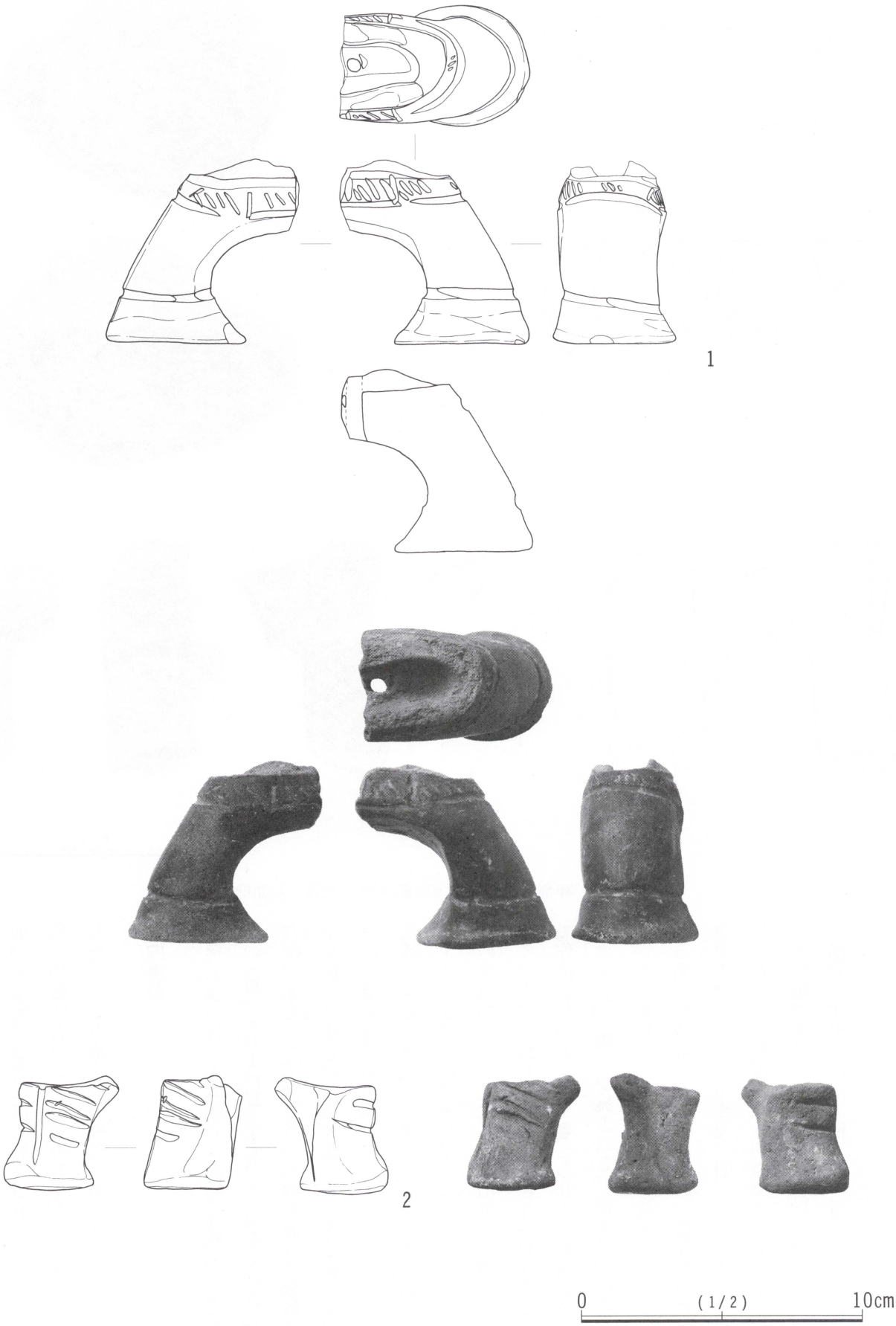


第５図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（4）

る。文様は鋭い沈線による。沈線はいずれも断面がV字形で鋭角に深く施文されており、部分的に肉彫状となる。文様の有無から右脚と判断した。ハート形土偶の残欠であろう。

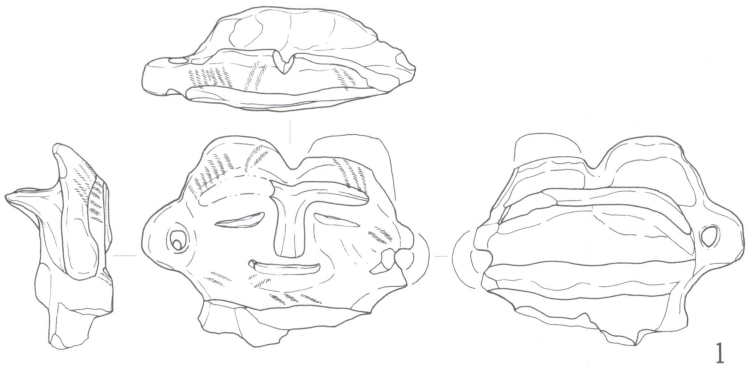
仏向遺跡

第七図一は、みみずく土偶頭部残欠である。左の「角」先および耳先を欠く。現存で高さ五・六cm、幅七・三cm、厚さ二・八cmを測る。全体にやや崩れた印象の表情となっている。断面半円形の隆帯で眉、鼻の順に描出する。眼、口は単沈線による。鼻孔は表現されない。耳は孔が貫通する。孔の内側はギザギザになっている。左耳の欠損部から、孔は耳を作出後に貫通させたのではなく、横U字状の粘土紐を貼付することで作出しているものと考えられる。顔面部の各所に無節r(rL縄文が施される。縄文は、隆帯の剥がれた箇所には見られなく、隆帯上に施文される箇所が認められることから、隆帯貼付後に施文されたことが分かる。目、口との先後関係は、切り合う箇所がなく判断できない。調整痕は不明瞭である。背面には横方向に薄く突出する部分が作出される。横方向の粗い擦痕が認め

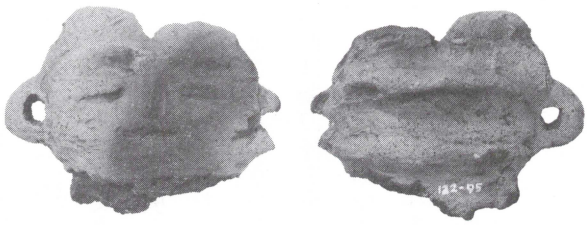


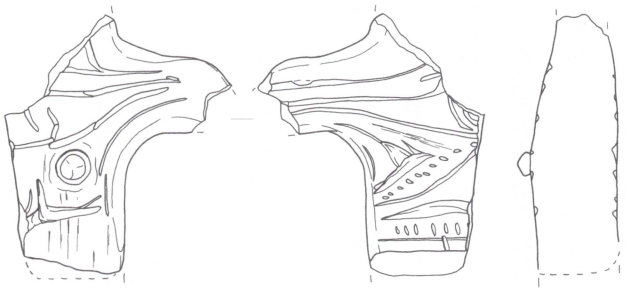
第６図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（5）

横浜市保土ヶ谷区仏向町　仏向遺跡



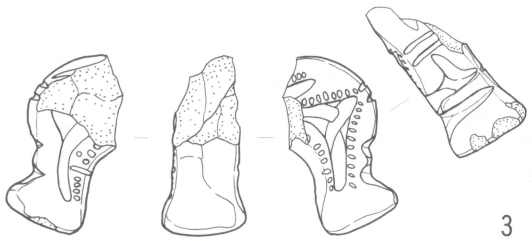
1





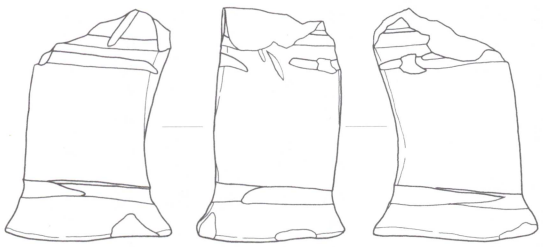
2



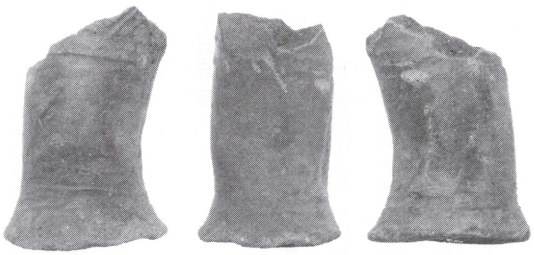


3

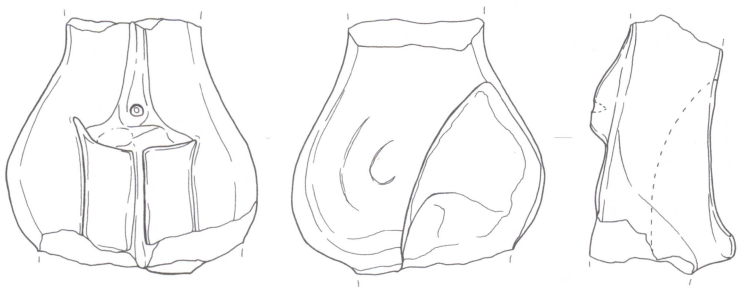




4

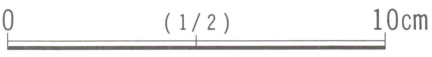


横浜市都筑区折本町　折本遺跡



5





第７図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（6）

られる。欠損面は割面状を呈する。

第七図二は、中実土偶の左頸～腰部残欠である。腕先も欠損する。現存で高さ六・九cm、幅六・〇cm、厚さ二・七cmを測る。前面には沈線による三叉文、入組文が描かれる。三叉文はいずれも半肉彫状を呈する沈線によるが、入組文は浅く弱い沈線による。乳房は粘土粒を貼り付けた後、縁を沈線により明確化している。背面は、部分的に細かな刺突が沈線に沿うように施される。三叉文の描出技法は前面と同様であるが、他の沈線は前面に比して深く鋭いものとなる。ケズリにより器面が整えられた後、沈線による文様が描かれる。背面の一部に、沈線の縁が調整により潰れている箇所が認められる。欠損面は、周縁に割れの痕跡があるが中央付近は滑らかになっており、製作時の粘土塊単位で破損していることが分かる。後述するように本資料と石井寛氏が過去に紹介した土偶が接合することが明らかになった。

第七図三は、中実土偶の腕部残欠である。現存で高さ四・七cm、幅三・一cm、厚さ二・二cmを測る。前面には、三叉文とそれに沿う細かな列点が施される。三叉文は太い沈線を組み合わせて描出する。腕外側には二条の単沈線が引かれ、その下には三叉文風の意匠が描かれる。背面は欠損部が多くやや不明瞭であるが、同様に三叉文とそれに沿う列点が施されるようである。腕内側および腕先端には文様は施されない。欠損面は擬口縁を呈さず、割面状である。

第七図四は、中実土偶の脚部残欠である。現存で高さ六・二cm、幅四・五cm、厚さ三・九cmを測る。自立するが、足裏は弱く湾曲しており、やや安定感を欠く。断面はほぼ円形で稜は見られない。欠損部直下と足首に浅い沈線による文様が描かれる。欠損部直下の文様は、横方向に二条の沈線を描いた後に斜位の沈線を描く。足首を巡る沈線は、非常に浅く、ミガキの痕跡とほとんど変わらないようなものとなる。文様の残存部が少なく詳細は不明瞭であるが、文様構成は三ツ沢貝塚例（第六図一）と類似するものと考えられよう。欠損面は擬口縁を呈さず、割面となる。山形土偶の残欠と考えられる。

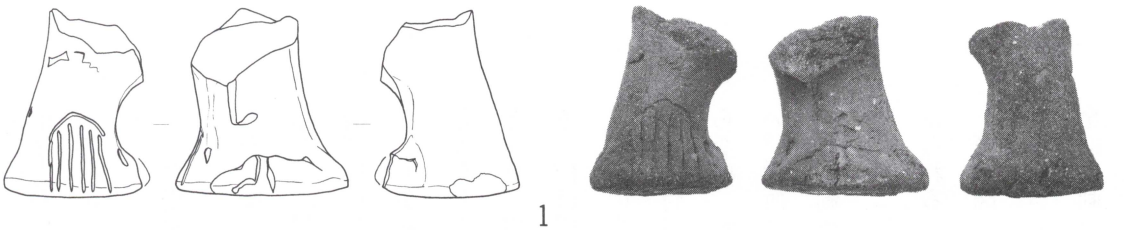
折本遺跡

第七図五は、中実土偶の胴～臀部残欠である。現存で高さ六・八cm、幅六・七cm、厚さ四・〇cmを測る。括れた胴部から緩やかな湾曲を描き大きな臀部へ移行する。前面の文様は隆帯による正中線と陰刻による対弧文（対称弧刻文）からなる。正中線の下端には、刺突により臍が表現される。背面は無文となる。右臀部がもぎ取られるように欠損している。全面が摩滅しており、調整痕は観察できない。表採品であることもあり風化の判断は困難であるが、欠損部も含め摩滅していることから、この状態での使用、保管期間がある程度存在した可能性も考えられるのかもしれない。中期中葉の所産と考えられる。

源東院台遺跡

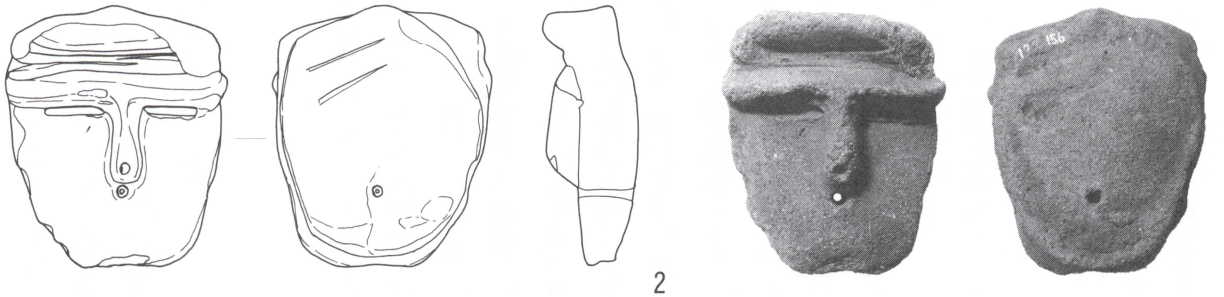
第八図一は、中実土偶の脚部残欠である。内側の先端、踵の一部を欠損する。足裏は平坦に成形されており、自立する。現存で高さ五・〇cm、幅三・七cm、厚さ四・六cmを測る。欠損部直下でわずかに肥厚する。片面のみに沈線による文様が描かれており、こちらを前面と判断した。

横浜市都筑区東方町　源東院台遺跡

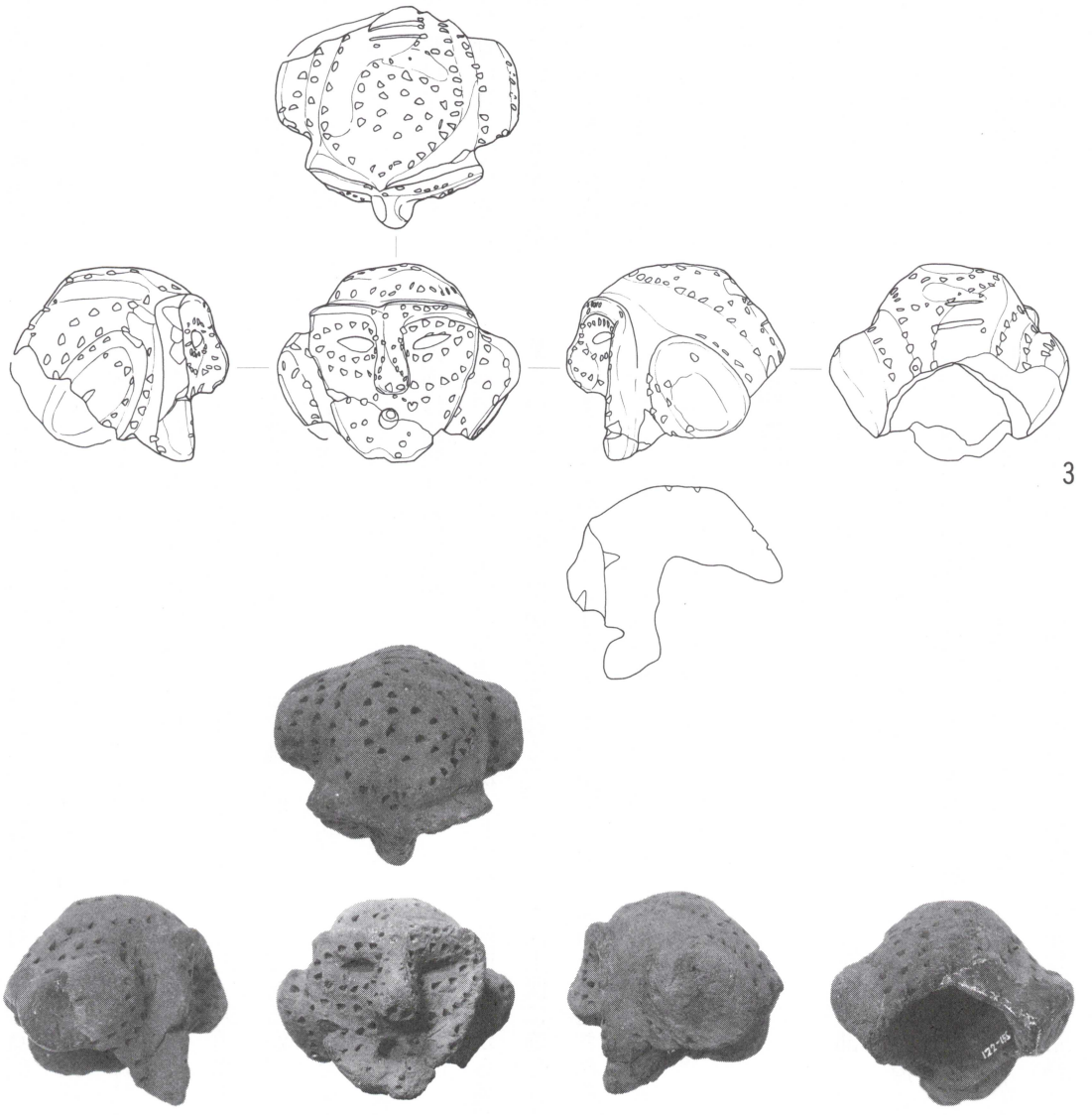


1

横浜市旭区上白根町



2



3

0　(1/2)　10cm

第８図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（7）

沈線は細くシャープである。弧線と六本の直線を組み合わせ、指先を表現している。全体に摩滅しており、調整痕は明瞭でない。足裏には前後方向に粗い擦痕が認められる。欠損面は、粘土塊で割れているようである。後期の所産と考えられる。

上白根町

第八図二は、顔面部残欠である。現存で高さ六・九cm、幅五・八cm、厚さ二・四cmを測る。断面三角形の隆帯で眉、鼻を作出する。鼻の先端には鼻孔が表現されるが、孔は一つである。先端の尖った工具によって、下から真上へ突き上げるように刺突している。眼は左右ともくっきりとした単沈線による。沈線が眉や鼻の付け根に食い込んでいることから、眉、鼻の隆帯を貼り付けた後に、眼を描いていることが分かる。口は円形の刺突による。背面まで孔が貫通する。口も鼻を作出する隆帯の裾を切っており、後に描出したことが分かる。額部にも隆帯が張り付けられるが、左右端とも欠損しており全体の形態はよく分からない。頬にやや粗い擦痕が認められる他は顕著な調整痕はみられない。背面は、周縁のやや内側に剥離痕が見られるが、擬口縁状をなしており剥離部分の範囲は不明瞭である。左上方に欠損がみられるが、採集時（耕作中か）によるものであろう。後期前葉～中葉の所産と考えられる。

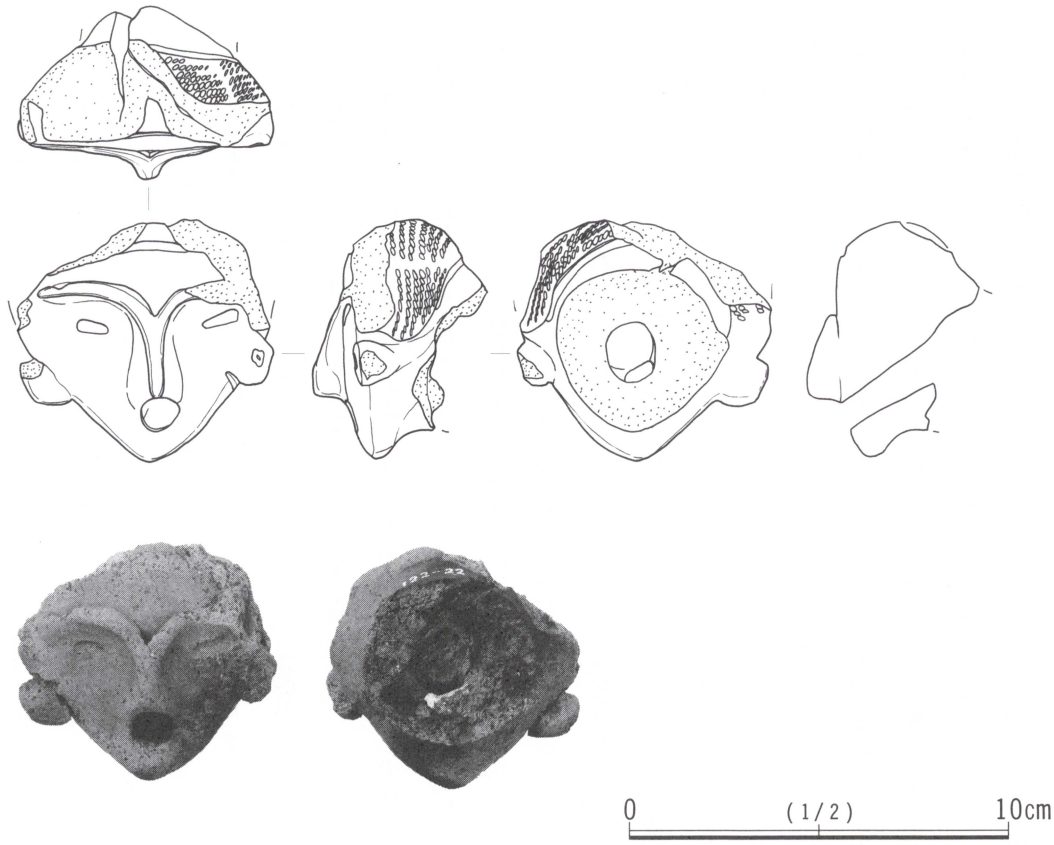
第八図三は、中空土偶頭部残欠である。後頭部以下を欠損する。現存で高さ五・三cm、幅六・四cm、厚さ五・八cmを測る。内面を除くほぼ全面に刺突が巡る。隆帯により眉、鼻を作出する。鼻の先端には鼻孔が穿たれる。鼻孔の刺突は、全面に巡る他の刺突とは方向、深さで異なっている。即ち、全面に施される刺突は器面に対しほぼ真直ぐ、やや浅いのに対し、鼻孔の刺突は下から真上へ向いており、また深さは五㎜程ある。眼は単沈線、口は刺突による。耳は粘土の貼付けにより大きく作出される。後頭部には横方向に二条の沈線がみられる。全面に施される刺突は、右眼の目頭付近、左眼の目尻付近、頭頂部を基点として螺旋状に列をなしている。施文順序は不明瞭であるが、文様のわずかな切り合いから、眉、鼻の隆帯を貼付した後、眼、口を描出するようである。調整は、部分的にナデが認められる他は明瞭でない。内面は指頭状の凹みがみられる。

本例のように、顔面に刺突を施す例としては、後期後葉から晩期後葉のいわゆる鯨面土偶が想起される。しかし、鯨面土偶に施される刺突の多くは本例よりも細かく、また頭部全面に満遍なく施されることは少ない。眼、口の表現も本例は単沈線のみによっておりやや異なっている。時期は不詳だが、後晩期の範疇には収まるであろう。

道明遺跡

第九図は、筒形土偶の頭部残欠である。額部から左頭頂部、両耳先端および頸部以下を欠く。現存で高さ六・二cm、幅六・八cm、厚さ四・六cmを測る。顔面には、細い隆帯による眉、鼻、浅い単沈線による眼、内面まで穿孔する口、耳がみられる。頭頂部には単節$\binom{R}{L}\binom{R}{R}$縄文が施される。施文順序はやや不明瞭であるが、眉隆帯の貼付、隆帯脇をナデつけた後、眼および口の穿孔となるようである。縄文との先後関係は

秦野市平沢南町　道明遺跡



第９図　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手（8）

第１表　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手　観察表

公田ジョウロ塚遺跡	（横浜市栄区公田町）				
第２図～第４図	時期：中期中葉	型式名等：勝坂式期	残存部位：頭部	重量：（1358.0ｇ）	焼成：良好
資料番号：CX0005551［122-158］	胎土：やや粗い。φ1mm程度の砂（白色・赤色・黒色）をやや多く含む。	備考：江守節子コレクション			
三ツ沢貝塚	（横浜市神奈川区三ツ沢町）				
第５図１	時期：後期？	型式名等：不詳	残存部位：顔面部	重量：(259.9ｇ)	焼成：良好
資料番号：CX0005890［122-85］	胎土：やや粗い。φ1mm程度の砂（透明・赤色・白色）を多く、φ2～3mmの砂（透明・赤色・白色）をやや多く含む。	備考：土器口縁部			
第５図２	時期：後期	型式名等：不詳	残存部位：頸～腰部（右）	重量：117.2ｇ、	焼成：良好
資料番号：CX0005883［122-78］	胎土：緻密。φ0.5mm以下の粒子（白色・黒色）を少量含む。				
第６図１	時期：後期	型式名等：山形土偶	残存部位：脚部（左）	重量：121.5ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005884［122-79］	胎土：緻密。φ0.5～1mmの粒子（黒色・白色・赤色・透明）を多く含む。				
第６図２	時期：後期	型式名等：ハート形土偶	残存部位：脚部（右？）	重量：37.2ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005885［122-80］	胎土：やや粗い。φ0.5～1mmの粒子（白色・赤色・黒色）をやや多く、φ2～3mmの砂（白色・灰色）を少量含む。	備考：全体に摩耗			
仏向遺跡	（横浜市保土ヶ谷区仏向町）				
第７図１	時期：晩期	型式名等：みみずく土偶	残存部位：頭部	重量：64.6ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005488［122-95］	胎土：緻密だが混入物多い。φ0.5～1mmの粒子（赤色・黒色・白色）を多く、φ2～3mmの砂（白色・赤色）を少量含む。				
第７図２	時期：後～晩期	型式名等：不詳	残存部位：頸～腰部（左半）	重量：(66.9ｇ)	焼成：良好
資料番号：CX0005489［122-96］	胎土：緻密。φ0.5mm程度の粒子（黒色・透明）をやや多く含む。	備考：石井資料と接合			
第７図３	時期：後～晩期	型式名等：不詳	残存部位：腕部（左？）	重量：21.6ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005491［122-98］	胎土：緻密。φ0.5mm程度の粒子（透明・白色）を少量含む。				
第７図４	時期：後期	型式名等：山形土偶	残存部位：脚部（右？）	重量：87.2ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005490［122-97］	胎土：緻密。φ0.5mm以下の粒子（白色）を多く、φ0.5mm以下の粒子（赤色・透明）をやや多く含む。				
折本遺跡	（横浜市都筑区折本町）				
第７図５	時期：中期中葉、	型式名等：勝坂式期？	残存部位：腰～臀部	重量：139.6ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005544［122-151］	胎土：やや粗い。φ3～4mmの砂（白色・赤色）をやや多く、φ1mmの砂（黒色・赤色・白色）を多く含む。	備考：林国治コレクション			
源東院台遺跡	（横浜市都筑区東方町）				
第８図１	時期：後期	型式名等：不詳	残存部位：脚部（右）	重量：55.7ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005499［122-106］	胎土：やや粗い。φ0.5～1mmの粒子（白色・赤色）を多く、φ2mm程度の砂（赤色・黒色・白色）をやや多く含む。				
（上白根町）	（横浜市旭区　上白根町）				
第８図２	時期：後期前葉～中葉	型式名等：筒形土偶？	残存部位：顔面部	重量：78.6ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005549［122-156］	胎土：やや粗い。φ0.5～1mmの粒子（白色・赤色・透明）を多く、φ0.5mm以下の粒子（黒色）をやや多く含む。	備考：高橋基コレクション			
第８図３	時期：後～晩期	型式名等：鯨面土偶？	残存部位：頭部	重量：(115.6ｇ)	焼成：良好
資料番号：CX0005548［122-155］	胎土：やや粗い。φ0.5程度の粒子（黒色・透明）を多く、φ0.5～1mmの粒子（白色）を少量含む。	備考：高橋基コレクション			
道明遺跡	（秦野市平沢南町）				
第９図	時期：後期	型式名等：筒形土偶	残存部位、頭部	重量：96.3ｇ	焼成：良好
資料番号：CX0005448［122-22］	胎土：やや粗い。φ0.5～1mmの粒子（黒色・赤色・白色）を多く、φ1～2mmの砂（黒色・赤色・白色）をやや多く含む。				

＊「重量」の（　）は、補修部分を含む全体の重量。

切合いがなく不明である。顔面はよく磨かれている。全体に細かな亀裂が多数みられる。後期の所産であろう。

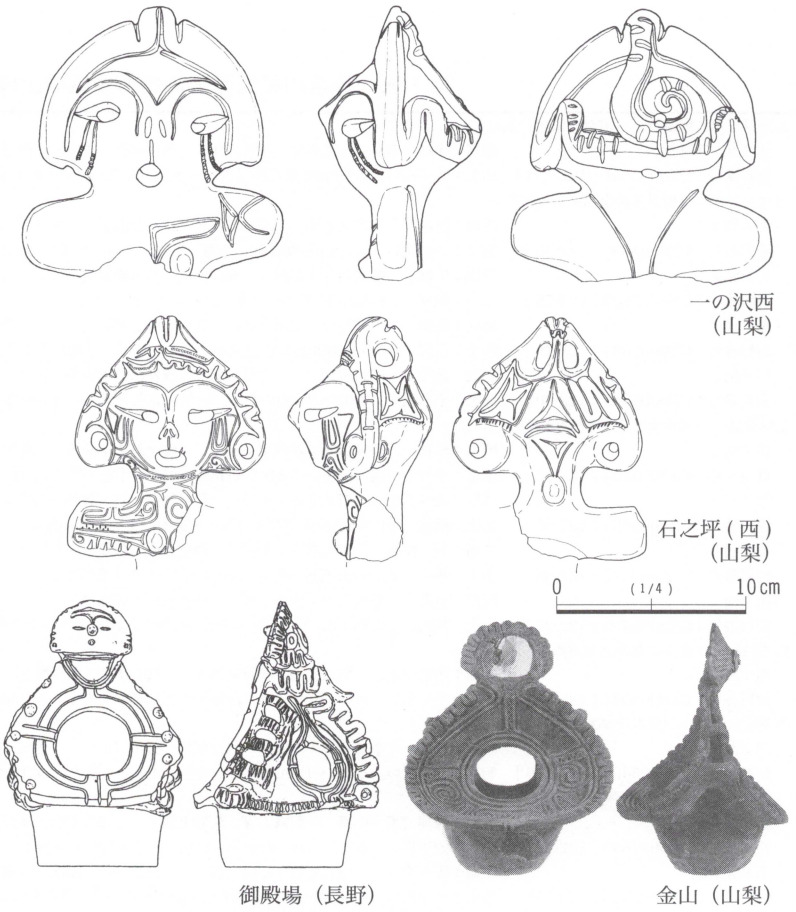
公田ジョウロ塚遺跡出土資料について

ここでは、公田ジョウロ塚遺跡出土の不明土製品の形態について若干の検討を加えてみたい。本資料は、頸部以下を欠損しているためその全体的な形態が不明である。勝坂式期において本資料のような顔面表現が施されるものとしては、大きくは土偶、人面（顔面）把手のいずれかであろう。本資料は、中空構造であることからこれまで深鉢形土器に付けられる人面把手とされてきた。しかし、各要素をみていくと、必ずしもそうとは言い切れないことが考えられる。

当該期にみられる通常の人面把手は、内向き、外向きのいずれでも深鉢の口縁に直接顎部・頭部が乗ることがほとんどであり、頸部はない。しかし本資料は、頸部が明瞭に作出されている。またその断面は円形になっており、土器口縁部との接続の想定が困難である。

一方、土偶であれば頸部は作出される。当該期の土偶は基本的に中実であるが、一部には頭部が中空になるものもあり（第一〇図上段）、中空であることが土偶であることを否定するものではない。土偶装飾付土器のような形態であっても基本的には同様である。しかし、その場合であっても、本例のように頸部まで中空になる例は見当たらない。また頸部断面は円形でなく扁平になる。焼成する際の問題として、本資料のような大きさのものであれば全体を中空にする必要があるとも考えられようが、それだけで結論づけるのはやや不安である。

別の可能性として考えられるのは、釣手土器の頂部に付く頭部装飾である（第一〇図下段）。これであれば、頸部が作出されその断面が円形になることは十分あり得る。また本資料の背面には鎖状隆帯が付されるが、先端が欠損している。土偶であればこの部位にさらに装飾が施されることは想定しにくい。深鉢の人面把手であれば、土器との接続を強化する橋状把手のようなものを想定できるかもしれないが、やや無理がある。釣手土器であれば、そのまま背面の釣手部に接続するものと考えられ違和感は少ない。またこのような頭部装飾が付される釣手土器は、概して大形になる傾向もある。このようなことから、現段階では、本資料は釣手土器の頭部装飾の可能性が高いと筆者は考



第10図　頭部が中空となる勝坂式期の土偶（上）、釣手土器（下）

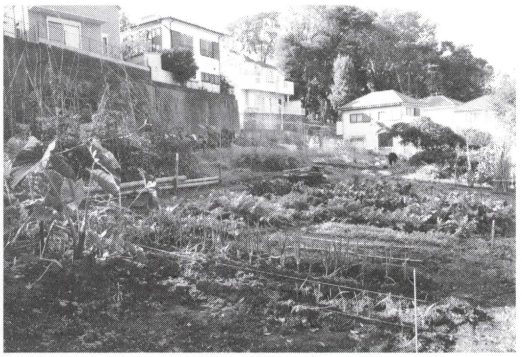
上段に示した土偶は、実測図では中空か分からないが、実見したところ頭部は中空であった。釣手土器は縮尺不同。



公田ジョウロ塚遺跡(60)の位置
(★が採集地)(横浜市文化財地図より)



採集地付近の皇女神社に設置された案内板



採集地の現状

第11図　公田ジョウロ塚遺跡の位置と現状

えている。

現状では、当該期の深鉢の人面把手、土偶あるいは釣手土器のいずれであっても、これほどの大きさのものは知られていない。ここでは釣手土器である可能性を指摘したが、釣手土器に付く顔面表現は通常平面的なものが多い点や釣手土器が盛行する時期と本資料の時期にわずかなズレが指摘できるなど、問題は残っている。いずれにしても未だ確定的ではなく、検討の余地はあろう。

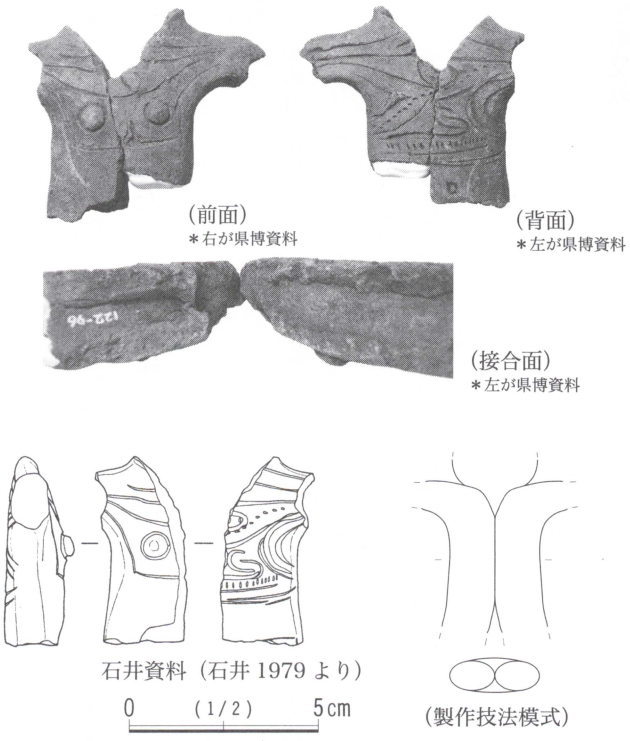
なお、本資料の採集地は、現在も採集当時と同様に畑地となっており、少量であるが遺物の散布が認められる。付近の神社には本資料の案内板が設置されている(第一一図)。

仏向貝塚出土土偶について

本稿を準備している際に、当館所蔵の仏向貝塚出土資料(第七図二)と、石井寛氏が過去に紹介している表採資料(第一二図、以下石井資料とする)(石井一九七九第二一図三)が接合することが明らかになった。これらはともに表採品であり、その評価は難しいが、土偶の接合例として紹介したい(第一二図)。

石井資料は、一九五〇年代より石井寛氏が知人らと仏向貝塚で宅地造成や畑作による深耕の際に出土した遺物を収集してきたものの一部で現在は既に消滅してしまったA貝塚と呼ばれる地点で表採されたものである。このことから県博資料もA貝塚で表採された資料である可能性が高い。なお、この際に石井氏らによって収集された土器片は、安行Ⅱ式から同Ⅲa式が主体である。

文様については先述したので、ここでは特に接合面などの観察から想定された製作技法について簡単に述べておきたい。先述したように、本資料の破断面は、中心部分が滑らかになっており、別に製作した粘土塊との境目で割れている。石井氏が既に同様の指摘をしており、製



第12図　接合した仏向貝塚出土土偶と製作技法模式

作技法についても以下のように詳細な記述がある。「断面楕円形の粘土紐を二本作り、これを横に接合して体部の核を作ったのち、この核に粘土を貼り付けながら全体を造形する」というものである。今回、接合する二つの資料の破断面を観察した結果、石井氏と同様の工程が想定された。また、同様の視点で改めて観察すると、粘土紐は腕部にまで続いているらしいことが分かった。模式的に表せば第一二図下段右のようになる。製作技法の類例については検索できなかった。同時期の資料の製作技法を踏まえた上で、今後の検討を要する。

なお両者には著しい風化の差などは認められなかった。

おわりに

縄文時代の神奈川県域は、房総半島や中部高地といった周辺地域に比べ土偶の出土があまり多くないことが指摘されている。そのような中にあっては、本稿において紹介したような、既発掘（表採なども含む）未報告資料の公開も重要な意味を持ってくるもの考えている。

今回は紙数の制約もあり、各資料の考察などにはいたらなった。今後の課題としたい。

謝辞

公田ジョウロ塚遺跡の現地踏査にあたっては、幸運にも今回紹介した資料の発見者である金子仲枝さんにご案内していただき、採集場所の詳細や当時の状況等についてご教示いただくことができた。接合した仏向貝塚出土資料については石井寛氏、高橋健氏にご教示賜り、実見することができた。また、土偶関連文献や観察については武内博志氏にご教示賜った。記して感謝申し上げたい。

註

一　本資料の出土地は「栄区公田町」と登録されているが、出土地が判明しており、横浜市文化財地図にも遺跡名が記載されているため、ここでは「公田ジョウロ塚遺跡」とする。

二　発見者である金子氏によれば、発見した瞬間には明瞭に赤彩が残っていたという。

参考文献

赤星直忠・岡本　勇一九七九『神奈川県史　資料編二〇考古資料』

石井　寛一九七九「横浜市保土ヶ谷区仏向貝塚の資料」『調査研究集録』第四冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

川口徳治朗一九八七「横浜市・公田町出土の大型人面把手」『神奈川県立博物館だより』第九六号　神奈川県立博物館

（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・編二〇〇八『地面の下にはナニかある―栄・戸塚区の遺跡展―』

吉本洋子・渡辺　誠一九九四「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第一号　日本考古学協会

吉本洋子・渡辺　誠一九九九「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補）」『日本考古学』第八号　日本考古学協会